

中国人留学生の日本語集中プログラム ——読解を中心に——

荻原 桂子*¹・呉 素蓮*²・沙 秀程*³

*¹九州女子大学

*²上海師範大学天華学院

*³九州共立大学

(2016年11月10日受付、2016年12月8日受理)

はじめに

海外で日本語学習者が多いのは、2012年の調査では中国の1,046,490人、次いでインドネシアの872,411人、韓国の840,187人、オーストラリアの296,672人、台湾の233,417人、米国の155,939人、タイの129,616人で、中国が全学習者の26.5%を占めている¹。

中国から日本に留学する中国人留学生の歴史は、明治時代における清国の中国人留学生にまで遡る。清国からの中国人留学生は1896年の13人にはじまり、1905年のピーク時には8000人以上にのぼった。1907年の清国留学生指定校は、宏文学院をはじめ早稲田大学、法政大学のほか、女子教育の実践女学校を含め19校あった。これらの教育機関では「清国留学生部」を設置し促成科を含め普通教育、師範教育、軍事教育などが実施され、中国近代化に貢献する多くの人材を輩出した。

中国人留学生の日本語教育者の草分けとして有名なのが、松本亀次郎である。松本亀次郎は37歳から宏文学院（設立は嘉納治五郎で、1902年までは弘文学院）で清国留学生向けの日本語教育にかかわり、日本語教師をしながら『改訂日本語教育』（1906）などの優れた教科書を編纂し、日中交流に大きく貢献した²。中国現代文学の父と称される魯迅（1881～1936）は、1902年4月から1909年8月まで官費留学生として日本に派遣された。魯迅は促成普通科の学生となるが、日本語教育にあたった松本亀次郎は魯迅の日本語の翻訳を高く評価している。

現在日本国内での中国人留学生はもちろん、中国で日本語を教えている学校やその他の機関の日本語学習者、テレビ・ラジオ・書籍・雑誌・インターネットなどで日本語を独習している日本語学習者も含めた日本語集中プログラムが重要になってくる。

日本語学習者のための日本語教育の環境の整備と教材の開発について、日本の大学（九州女子大学・九州共立大学）に



写真1 御雛様

おける日本語教育と中国の大学（上海師範大学天華学院）における日本語教育の現状を調査研究するために共同研究を実施した。上海師範大学天華学院日本文化研究実践基地には福原学園から贈呈された御雛様が飾られている（写真1）。協定校における日本語教育の実態調査研究は両校の交流を深める重要な機会になるに違いない。

1. 日本語教育について

日本語教育とは、外国人のためだけでなく日本人のためにも必要ではないか。日本語を外からみると、日本語について知らなかったことがたくさんあることに気づかされる。日本人だから日本語は勉強する必要はないと思っていると案外失敗することがある。情報化・国際化が声高にさげられる現代社会において、日本語の知識や運用能力が必要とされる場面が多くなってきた。日本語を外国語として学習する中国人留学生とともに、日本人学生も外国語として日本語をみってみるとさまざまな発見がある。

言語を学習するのは、しぐさや外見などでは表せない思考や意見を具体的に相手に伝えるためである。母語である第一言語にくわえて、母語以外の第二言語で自分の思想や意見を相手に伝えるということについて考える。母語でさえ、自分の思想や意見を明晰に相手に伝えるには工夫が必要である。まして、話者の母語でない第二言語で自国の言語しか知らない相手に自分の思想や意見を伝えるのは困難である。第一言語では不自由しなかった日常会話も第二言語となると思うようにいかないということは多々ある。

本論では、中国語を母語とする中国人留学生が日本語を第二言語として学習するうえでの言語学習について考察する。尾崎明人氏は、「日本人が外国人とのコミュニケーションを成功させたいと考えて、努力しない限り、外国人の日本語能力が伸びても円滑なコミュニケーションは保証されない」⁵と指摘する。日本人同士のコミュニケーション能力の危惧がささやかれる現代、日本語教育は、さまざまな異なった背景をもった人々とのコミュニケーション能力の向上という視点からも大切であると考え。尾崎明人氏は「日本語教育の考え方を日本人に対する教育に取り入れるという視点も重要になる」⁶と述べている。外国人のための日本語教育というよりも、相互理解のためのコミュニケーションツールとして日本語を相互に理解し、学び合う姿勢がなによりも大切であると考え。日本語教育を、文化的理解および人間理解を深めるための語学学習と捉え、積極的な相互理解を生み出すために読解に焦点を絞った日本語教授法について考察する。

2. 読解集中プログラムについて

語用論的転移⁷と社会言語学⁸的転移を深く理解することが、外国語学習には大切である。日常言語能力は自国で学習することができるが、認知学習言語能力は外国文化のなかで外国人と交わりながらでないと身につかない。この認知学習言語能力は、相手の文化への興味や

実利があるほうが伸びやすい。自国で学んだ言語能力（音声・単語・文法）を基礎として、現地の外国人と交わることで談話能力を伸ばし、実際の文化に慣れることで社会言語能力を育むことができる。言語能力・談話能力・社会言語能力を総合的に育成することを重視した語学学習の方法を確立することが重要である。

世界の言語は、推定5000～7000ある。このなかで、2009年のデータによると日本語を第一の言語として話す人の数は世界で9番目で、第1位中国語、第2位スペイン語、第3位英語、第4位アラビア語、第5位ヒンディー語、第6位ベンガル語、第7位ポルトガル語、第8位ロシア語が続く⁹。また、日本語を勉強しようという外国人の数は、2012年の統計では390万人以上となった。これだけ、たくさんの外国人が学習しようとする日本語を外国人の立場から見直し、日本語学習者に日本語教育プログラムを開発することは重要である。

現在、日本では外国語として英語・韓国語・中国語を学ぶ人は多く、また、国内外で日本語教育に携わる人も増えている。第二言語習得における外国語学習の科学は21世紀になって急速に発展している。グローバルな視点に立った世界観が一般化するにつれて、外国語学習は以前にも増して、現代を生きぬく知性の要件である。言語学・心理学・認知科学・人類学といったさまざまな学問を巻き込んで、外国語学習の科学は進歩している。文法訳読方式から外国語による外国人とのコミュニケーション重視の学習効果が問われている。

政府は、日本語教育の体制整備として1984年に日本語能力試験、1988年に日本語教育能力試験が開始し、当時の文部省が主導する試験制度が実施された。1989年には入国管理の必要から財団法人日本語教育振興協会が作られ、日本語学習者の民間教育施設の認定等の対応にあたっている。日本語能力試験とは、日本語を母語としない人の日本語能力を測定し認定する試験として、国際交流基金と日本国際教育協会（現日本国際教育支援協会）が開始したもので、近年、日本語能力試験の受験生が多岐にわたり、その受験目的も実力の測定に加え、就職、昇給、昇格、資格認定への活用など、変化や広がりがみられるようになり、2010年から新しい日本語能力試験が実施されている。改訂されて初めての2010年第1回試験は、国内33都道府県、海外13カ国・地域の80都市で実施され、応募者数は2014年で国内16万人、海外52万人の計68万人となっている¹⁰。

中国の政治・文化・経済において日本は重要な国であり、日本語を習得することが中国人学生にとって有益である。日本人とは異なった言語、思考パターン、文化をもった中国語を母語とする中国人留学生に、日本語を第二言語として習得させるカリキュラムと教科書が必要である。

白井恭弘著『外国語学習の科学』¹¹によると、言語間の距離が外国語習得の難易度に影響があることから、中国語（北京語）と日本語の距離は、英語ほど離れてはいない。というのは、漢字文化圏に属することから、日本語に多用される漢語は比較的共通性をもっている。ただ、孤立語である中国語とは違って、膠着語という日本語の特性から、助詞・助動詞の使い方が

中国人には難しいと思われる。こうした中国語と日本語の距離を正しく理解し、その言語の特性を学び、思考パターンや文化にいたるまでを含めた言語観を身に付けることが目的である。

国際交流基金と日本国際教育支援協会では、日本語能力試験における読解とは目の前のテキスト（文章）を読む目的や課題に合わせて、言語知識や話題に関する知識と、それらを利用する能力を一緒に使用して、テキストに書かれている情報を処理し、理解していく過程であるとしている。読解の過程には、テキスト中の語から文、文から文章へと、小さな単位からより大きな単位へ段階的に進めていく読み方（ボトムアップ読み）と、言語知識や話題・場面に関する背景知識を活用して、テキスト全体の内容を予想し、次に来る細かい内容を予測しながら読み進めていく読み方（トップダウン読み）の、二つの方向の読み方がある。そして、この二つの読み方が同時に行われ、お互いに補い合ってさらに理解を深める読み方（相互作用読み）も行われる。ただし、実際の生活で行われている読解はもう少し複雑で、いろいろな読み方をしている。たとえば、同じ日本語で書かれたテキストでも、難しいテーマを扱った評論を読んで理解するのと、商品のパンフレットを見て機能や値段を見比べるのとでは、読み方が異なる。評論では論の流れを追いながら細かく正確に理解していくことが必要で、パンフレットでは探している情報を全体から素早く見つけ出すことが必要である。このように読解では、目的や課題に合わせて言語知識や話題に関する知識を利用するだけでなく、読み方を選ぶ能力も重要である。読解の目標は、テキストから何らかの情報を得ることと言える（2012The Japan Foundation, Japan Educational Exchanges and Services）。

3. 上海師範大学天華学院日本語科のカリキュラム

上海師範大学天華学院は2005年に創立された4年制高等教育機関であり、日本語科は設立当初の科のなかの一つである。福原学園とは2011年12月に協定校締結している。

上海師範大学天華学院の日本語科は「確実な日本語力と広範な科学文化の知識、すなわち外交、貿易、文化、新聞、出版、教育、科学研究、観光等の分野において翻訳、研究、教授、管理業務に従事することのできる、ハイレベルかつ専門的な日本語を身につけた人材の養成を教育目標」とし、卒業までに習得しなければならない合計単位数164単位のうち日本語教育に107単位が充てられ、1・2年次の教育は「入学直後のゼロ初級から2年間は精読を中心に据え、会話と聴解により「話す」と「聞く」ことを補強」し、3・4年次になってから「精読のほか「考える」ことを伴う新聞講読、作文及び知識を広めるための文学作品選読、ビジネス日本語などの時間」も置かれている¹²。協定校である上海師範大学天華学院日本語科での日本語教育現場を視察することによって、中国人留学生の日本語教授法について考察する。

「基礎日本語」では、精読の授業を通して発音、語彙、文法、読解、聴解が総合的に指導される現場を視察した(写真2)。「精読」のほかに、「聞く」「話す」「書く」「読む」「文法」「日本事情」などの科目が設置されている。日本語学最初のメインとなる科目で、2年後期までである。日本語初心者を対象にした教材を使用している。中国語は単語の意味と文法・文型の解説部分にしか用いていない。



写真2 精読授業

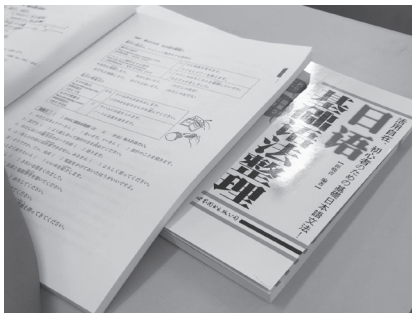


写真3 日本語文法テキスト

文法の授業では、日本語文法の教科書を使って、教員が板書しながら指導していた。初級で中心となるテキストは『新編日本語』(上海外国語教育出版)1~4で、語彙、文型、読解において日本語能力試験N2までカバーできる内容となっている(写真3)。文法指導における教室は日本での様子と変わりなく、教員と学生の質疑応答にも違和感はなかった。

「上級日本語」では、『日本語総合教程』(上海外国語教育出版社)5~8で、作文、翻訳、日本文学作品、古典などにおいて、選考日本語能力試験八級程度までをカバーできる内容となっている¹³。上海師範大学天華学院日本語科で日本文学作品に古典を指導するというのには驚いた。日本でも古典文法は苦手な学生が多いのに、外国語の古典文法を指導するのは大変である。文法よりも、日本文化として古典を指導するほうが日本語教育では有効であると考えた。作文指導、翻訳指導も積極的に指導していることに関心を持った。翻訳指導は、中国語の語彙力と第二言語である日本語の語彙力が総合的に必要とされる高度な日本語教育である。上海師範大学天華学院日本語科での翻訳指導は、「1. 原文の考え方や意図などを的確に伝える。2. 訳文の全体の風格は原文の風格と合致させる。3. 訳文は(原文と同程度に)流暢で分かりやすい文にする。」¹⁴というレベルの高い日本語教授法がとられている。

さらに、上海師範大学天華学院日本語科では将来日系企業等に就職する学生のために「ビジネス日本語」を3年次の通年必修科目として設置し、指導に当たっている。写真は、名刺交換のスライドを見せながら、日系企業の現場での



写真4 ビジネス日本語

ビジネス会話やビジネスマナーを指導している（写真4）。

上海師範大学天華学院日本語科では、日本の文学作品を通して学生の言語能力や文学鑑賞能力を高めるために「文学作品選読指導」を実施している¹⁵。日本語教育において、外国文学の作品鑑賞・研究も視野にいれて指導している。その成果は、学生の日本文学の優れた理解に表れている。

4. 上海師範大学天華学院での村上春樹の読者

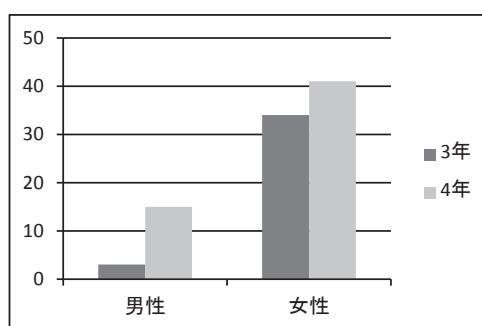
世界の村上春樹の読者のなかでも、中国においてよく言われる「村上春樹熱」の実態はどのようなものであるか。王海藍氏は中国本土11都市にある22大学3000人の大学生（院生を含む）を対象にアンケート調査を実施し、中国での「村上春樹受容」の実態を分析した¹⁶。

王海藍氏の調査研究・分析結果を参考にして、今回、上海師範大学天華学院日本語科の学生93人（3年男性3人女性34人、4年男性15人女性41人）を対象に「世界文学としての村上春樹」についてアンケート調査を実施した。調査対象の100%が文系、80%が女子学生であった（表1）。これは、王海藍氏が「現在、中国の大学の文系には男子学生より女子学生が多く、特に言語・文学を専門とする学部や学科ではこのような傾向が顕著で、深刻な問題にもなっている」¹⁷と述べるように、日本の言語・文学を専門とする学部や学科の事情と同じであることがわかる。

表1 アンケート調査対象の上海師範大学天華学院日本語科の学生数

	男性	女性	合計
3年	3	34	37
4年	15	41	56
合計	18	75	93

図1 アンケート調査対象の上海師範大学天華学院日本語科の学生数



調査方法は、事前に上海師範大学天華学院日本語科にアンケート用紙を電子ファイルで送り、共同研究者に調査を依頼した。2016年9月12日・13日授業中に学生たちにアンケート用紙を配り、その場で回答し、回収してもらった。回答に費やした時間は一人20分である。回収したアンケート用紙は全て有効であり、天華学院日本語科の学生がもつ日本文学に対する豊かな知識と鑑賞力には瞠目するものがあった。

また、2016年9月12日から上海にはいり、9月13日にはアンケートに回答してくれた学生たちに講演「世界文学としての村上春樹」を実施した。アンケート後の講演で、日本語科の



写真5 世界文学としての村上春樹

学生と積極的な質疑応答が交わされた。男性の学生からは、村上春樹の作品について質問があり、「草食男子」の意味について日中の比較が行われた（写真5）。

その後、共同研究者とアンケート回答用紙の分析に取りかかった。日本語のアンケート用紙に、学生が中国語で回答している部分に関しては翻訳した。

調査項目は、以下の12項目である。

- ①世界における日本文学について、あなたはどのように思いますか。
- ②あなたが知っている日本の作家を選んでください（複数回答可）。その作家の作品を書いてください。
- ③あなたは、村上春樹という作家を知っていますか。
- ④あなたは、村上春樹の作品を読んだことがありますか。
- ⑤あなたが読んだ村上春樹の作品を下から選んでください（複数回答可）。
- ⑥村上春樹の作品を読もうと思った理由は何ですか（複数回答可）。
- ⑦どのような方法で村上春樹の作品を読みましたか（複数回答可）。
- ⑧村上春樹の作品にどんな印象を持ちましたか（複数回答可）。
- ⑨村上春樹の作品を読んで、日本についてどのようなことを思いましたか（複数回答可）。
- ⑩村上春樹の作品は50カ国に翻訳されていることについてどう思いますか（複数回答可）。
- ⑪中国における「村上春樹熱」の原因は何だと思えますか（複数回答可）。
- ⑫あなたは村上春樹をほかの人に薦めたことがありますか。

①②の質問では、日本語科の学生が日本文学について持っている印象や具体的にどういった作家の作品を読んでいるか調査した。日本文学に対しては、「精巧で含蓄を含む」が「曖昧な表現が多く、読みにくい」という感想が多かった。翻訳ではあるが、『古事記』、『日本書紀』、清少納言『枕草子』といった古典もあった。同じく翻訳で、夏目漱石『吾輩は猫である』、芥川龍之介『羅生門』、川端康成『雪国』、太宰治『人間失格』、三島由紀夫『金閣寺』といった近代文学の代表作が読まれていた。これらは、日本語科の授業で紹介されたテキストであり自発的な読書とは言えない。学生の自発的な読書として人気があるのは現代文学であり、翻訳で村上春樹『ノルウェイの森』、東野圭吾『白夜行』が多数の学生に読まれていることが今回の調査でわかった。東野圭吾に人気があるのは意外であったが、今回村上春樹がどう読まれているかについて調査した。

③④の質問では、上海師範大学天華学院日本語科93人の学生に対する村上春樹の認知度を調べた。表2図2は村上春樹を知っているかについて、表3図3は村上春樹の作品を読ん

だことがあるかについて調査した結果である。

表2 村上春樹を知っているか

知っている	知らない	合計
90	3	93

図2 村上春樹を知っているか

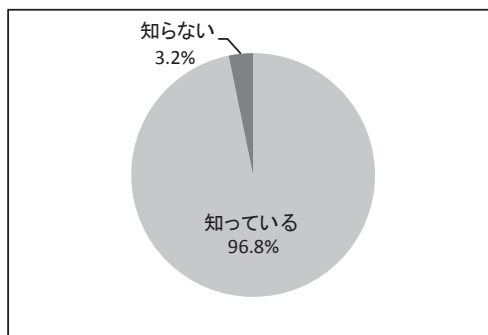
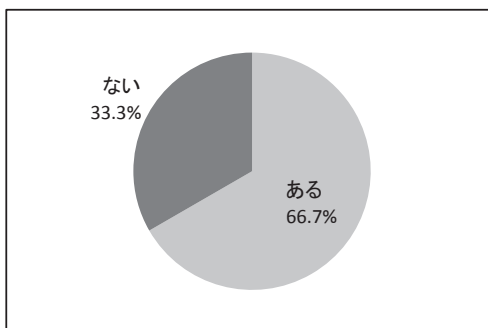


表3 村上春樹を読んだことがあるか

ある	ない	合計
62	31	93

図3 村上春樹を読んだことがあるか



全体の96.8%の学生が村上春樹という日本の作家の名前は知っているが、実際読んだことのある学生は全体の66.7%であり、外国文学である村上春樹を多くの学生が読んでいる。

⑤の質問では作品名をあげてもらったが、『ノルウェイの森』が58人で断然トップで、『海辺のカフカ』が12人と続く。初期3部作も人気があり『風の歌を聴け』が10人、『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』が同じ3人であった(複数回答)。短編では『夜のくもぎる』5人、『中国行きのスロウ・ボート』『東京奇譚集』『ランゲルハンス島の午後』が同じ3人、エッセーでは『村上春樹堂』が4人であった。『IQ84』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』などの長編を読んでいる学生も各2人いた。村上春樹の作品がほぼ同時に中国語に翻訳されていることから人気のほどが想像できる。⑥村上春樹作品を読んだ理由については、「流行しているから」が一番多く、「他の人から薦められたから」も多く、「性愛描写があるから」というものもある。⑦村上春樹作品を読んだ方法については、「ネットからダウンロードした」が一番多く、次に「書店で購入した」「図書館で借りた」という学生が多い。

⑧村上春樹作品の印象については「孤独と喪失感に満ちている」が一番多く、「日本というより欧米のスタイルを持っている」「性愛描写が多い」というものがある。⑨村上春樹作品を読んで思ったことは「日本文化を知りたい」「日本へ旅行したい」「日本の友人を作りたい」「日本語を勉強したい」というもので、村上作品から日本に対しての興味関心が強くなったことを示している。⑩村上春樹作品が50カ国に翻訳されていることについては「作品が魅力的だから当然である」「素晴らしい作品には国境がない」といった村上作品への肯定的な意見が多かった。⑪中国における「村上春樹熱」の原因については「村上春樹作品に魅力がある」という意見が一番多く、「周囲の国の若者が読んでいてブームになった」という意見や「マスコミや出版社の力」という意見はあったが、「翻訳者の力」という回答は少数であった。⑫のあなたは村上春樹をほかの人に薦めたことはありますかという質問には、「はい」とこたえた学生と「いいえ」とこたえた学生は半々だった。上海での調査研究において立ち寄った書店で外国文学1位は石田衣良で、東野圭吾が2位と5位と10位にランクインし、村上春樹は10位中に入っていなかった。

5. 読解を取り入れた日本語集中プログラム

村上春樹文学は日本文学という枠ではなく、日本語で書かれた世界文学という認識が広がっている。村上春樹は、1979年のデビュー作『風の歌を聴け』から無国籍文学を漂わせていた。村上春樹の出現で、日本を通して日本文学を読む、日本文学を通して日本を知るという枠組みで日本文学が語られなくなったのである。村上春樹が砕いた日本文学という枠を、後続の現代作家は難なく越えていくようである。河野至恩氏は「日本文学の翻訳は、日本文学を教えるためのインフラなのである」と指摘し、次のように述べている¹⁸。

日本文学の翻訳を「教材」として使うのは、文学の授業だけではない。たとえば日本史、日本文化、現代の日本社会を学ぶ授業でも、学問的な分析やデータによって客観的に書かれた記述を読むだけでなく、「内側から」の視点を学ぶうえで文学作品や映画が用いられることが多い。

日本の文脈にひらいていて、世界の人々に普遍的な興味関心をもたらす日本語文学は、日本語教育のテキストとしてふさわしいと言える。多文化共生リテラシーの重要性が濃くなり、異文化間のコードの違いを解読する知力が、現代社会においては最も必要な能力である。他者へのアプローチを日本現代文学という視点から試みる日本語教育プログラムについて考案する。日本現代文学をテキストにして、読解技術に特化したプログラムを作成するのである。

何志明氏は「異文化間コミュニケーションの場合、同じ内容でも言語が違えば表現の仕方も言語のニュアンスも異なる。相手の考えを知るために会話をするのだが、言い方によって

は互いの誤解を招くことにもなりうる。その言語の背後にある文化が理解できないと、誤解が生じる可能性が高くなる¹⁹と指摘する。どのように表現したらいいかは、その言語が使用されている社会の習慣によるのである。社会の文脈を読み取るには、その言語が使われる社会の文脈をできるだけ多く読みこなすしかない。日本語文法のテキストをどれだけ正確に暗記しても、行間からこぼれ落ちていく文脈を理解することはできない。そこで、中国人留学生に有効な日本語集中プログラムとして、日本現代文学の読解を授業に組み入れたカリキュラムを推進する。一週間に1回90分、日本人教員と日本現代文学を精読する読解の授業を実施するのである。テキストは、中国人留学生の興味関心が持てる日本現代小説の短編が適している。中国語で翻訳されている宮沢賢治の童話や太宰治・村上春樹の短編作品が読解のテキストにふさわしいと考える。村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』は、7編の短編「中国行きのスロウ・ボート」「貧乏な叔母さんの話」「ニューヨーク炭鉱の悲劇」「カンガルー通信」「午後の最後の芝生」「土の中の彼女の小さな犬」「シドニーのグリーン・ストリート」からなる。日本語のオリジナルテキストと中国語の翻訳テキストをセクションに区切って、両言語による音読で読み合わせる。中国人留学生は中国語で、日本人教員は日本語で作品を読み上げることで、両言語の響きやニュアンスが声の調子に合わせて、異文化を越えたハーモニーを奏するのである。中国人には日本語の聴解、日本人には中国語の聴解の力を生で鍛えることができる。同時に、漢字、語彙、文法を総合的に組み込んだ読解に特化した日本語集中プログラムである。

読解を中心とした日本語集中プログラムは、1つの短編作品に90分3～4回の授業を実施し、7編の作品を半年で読みあげるといふものである。多文化共生社会に生きる私たちは、お互いの異文化を尊重し、理解し、学びあう努力を重ねることで新たな関係性を構築することができる。

国際交流基金と日本国際教育支援協会が打ち出したCan-Do Statementsについて、伊東祐郎氏は「社会学的な観点から新たなコミュニケーション能力のモデルを提示し、教育の方法や評価のあり方への枠組みに新たな解釈の基礎を提供しようとしている」と指摘し、次のように述べている²⁰。

Can-Do Statementは、コミュニケーション活動にかかわる能力が言語化されたものである。学習者にとっては達成すべき目標が明確になっている。教育者にとっては、言語行動と言語学習に一貫性を持たせられる教育目標の設定が可能で、教育内容と整合させた評価が実現できる。

日本語学習者が目標言語を使って何ができるか具体的な中身とともに把握できるチェックリストを持つことは有効である。言語のハードな部分をこうしたチェックリストで確認しな

から、言語のソフトな部分を目標言語の背景を読み取る読解で補強していくというのが、第二言語習得には必要不可欠である。言語のソフトな部分を強化するには、比較文化論、多文化理解の視点から、異文化間の衝突を多文化共生という内側からのソフトパワーで乗り越えていかなければならない。

おわりに

国際交流基金調査（複数回答可）では、学習の目的として最も多くの機関が挙げたのは「日本語そのものへの興味」（62.2%）、次いで「日本語でのコミュニケーション」（55.5%）、「マンガ・アニメ・J-POP 等が好きだから」（54.0%）、「歴史・文学等への関心」（49.7%）となっていると述べ、「将来の就職」（42.3%）は全体5位、「日本への留学」（34.0%）は7位となっており、実利的な目的より、日本についての知識面での興味が上回る結果となったと報告している²¹。また、「マンガ・アニメ・J-POP等が好きだから」は、「歴史・文学等への関心」を上回っており、日本のポップカルチャーが世界的に浸透し、日本・日本語への興味・関心の入り口となってきていることがよくわかり、ポップカルチャーをはじめとする日本文化は、旧来の各種マスメディアを通じて、さらに近年ではインターネットを通じて世界中からアクセスがしやすくなっていることが、こうした状況に拍車をかけているものと考えられる²²。

こうした学習者のモチベーションも考慮に入れて、中国人留学生個々の能力を測りながら、読解を中心とした日本語集中プログラムを立案し、実施することが重要であると考え。

注

¹ 独立行政法人国際交流基金編（2013）『2012年度日本語教育機関調査 結果概要』抜粋p.7

² 岩田一成他（2012）『日本語教育能力検定試験に合格するための用語集』アルクp.28

³ 尾崎明人（2001）「日本語教育はだれのものか」青木直子・尾崎明人・土岐哲編『日本語教育を学ぶ人のために』世界思想社p.5。

⁴ 尾崎明人 同掲書p.7。

⁵ ことばは、文法的に正しいかとは別に、社会的な文脈の中で、そのときの状況や聞き手が誰かなどさまざまなことを考えて適切に使わなければならない。第二言語使用者が母語での適切さを基に第二言語を使うためにおこる言語転移を語用論的転移（プラグマティック・トランスファー）と呼ぶ。例えば、日本語で誘いを断る場合には、「先約があるんです、すみません」のように理由だけを述べたり、「その日は、先約があつて……」のように文末まで言わない形がよく使われるが、行けないという事実や理由をきちんと述べたほうが適切だとされる母語を持つ学習者の場合、「すみません、その日は先約が

- あるので、行けません」のように文末まできちんと述べた断り表現を使うことがある」
岩田一成他（2012）『日本語教育能力検定試験に合格するための用語集』アルクp.88
- ⁶ 「言語学は長い間、文字どおり「言語」のみを研究対象として取り扱ってきた。しかし、20世紀の中ごろから、言語と社会との相互作用を重視する研究者が現れた。その中でも言語とそれが使用される社会（人間集団、コミュニティ）との関係を明らかにしようとするのが社会言語学である。その内容は、言語変種や言語接触などによる言語の変化を研究する狭義の「社会言語学」と、社会・コミュニティによる言語の働きかけを研究する「言語政策論」に大きく分けられる」岩田一成他（2012）『日本語教育能力検定試験に合格するための用語集』アルクp.56
- ⁷ 荒川洋平（2009）『日本語という外国語』講談社現代新書p.10
- ⁸ 岡田英夫（2015）「日本語力をどのように測るか」『日本語教育能力検定試験に合格するための基礎知識50』アルクp.196
- ⁹ 白井恭弘（2008）「学習者の母語と学習対象となる言語が似ていれば似ているほど、つまり距離が近ければ近いほど、全体としては学習しやすい」と述べ、「言語間の距離」について指摘している。『外国語学習の科学——第二言語習得論とは何か』岩波書店p.2。
- ¹⁰ 呉素蓮他（2014）「天華学院における日本語教育の現状と課題——上級日本語教育実践を中心に——」では「総授業時間数は2110時間が当てられている。この時間数は、日本語能力試験1級の認定基準に示される900時間という学習時間に比べればかなり多いが、日本語使用環境ではない海外の学習機関で十分な教育を行うためには、このくらいの時間数が必要だ」と述べている。『九州共立大学研究紀要』第5巻第1号p.36
- ¹¹ 呉素蓮他同掲書p.37
- ¹² 呉素蓮他同掲書p.38
- ¹³ 呉素蓮他「教師が主導、学生が主体」という新しい教育理念に立って授業を展開するなかで、「教師が作品の原著や関連書籍のリストを学生に示して適切なアドバイスをおこなうと、いきおい学生は、それぞれの関心に応じて主体的に作品鑑賞・研究に向かうことになる」と述べている。同掲書、p.40
- ¹⁴ 王海藍（2012）は「現在、村上春樹の作品は四〇カ国で翻訳・出版され、中国の『中華読書報』は早い時期の一九九六年に「村上春樹の小説の売り上げがよい」旨の報道を行って、今日における「ブーム」の到来を予見するということがあった。また、二〇〇四年十一月二〇日の『読売新聞』は、「中国で村上春樹が爆発的人気、経済成長が背景」という見出しで中国における村上春樹現象を紹介し、「こうした村上春樹を支えるのは、都市部の若い世代。急速な経済発展に伴って生まれた『小資』（プチ・ブル）や『白領』（ホワイトカラー）によって、今や村上作品は、必読の書だ」と報じた。中国の『東宝早報』によると、二〇〇九年九月八日、村上春樹の新作『IQ84』の版權

は、激しい争奪戦の末、北京新教典文化有限公司が過去最高額となる一〇〇万ドル（約九二〇〇万円）で落札したという」と中国での「村上春樹熱」について述べている。『村上春樹と中国』アーツアンドクラフツp.11

- 15 王海藍（2012）「中国における村上春樹の読書」同掲書p.95
- 16 河野至恩（2014）「海外の大学から見る「日本文学の発信」『世界の読者に伝えるということ』講談社現代新書p.177
- 17 何志明（2009）「香港滞在中の日本人留学生及び日本留学歴を持つ香港人学生のコミュニケーションにおける問題点」萬美保・村上史展編『グローバル化社会の日本語教育と日本文化』ひつじ書房p.251
- 18 伊東祐郎（2009）「日本語教育スタンダードをめぐる議論を終えて」萬美保・村上史展編『グローバル化社会の日本語教育と日本文化』ひつじ書房p.67
- 19 独立行政法人国際交流基金編（2013）前掲書p.4
- 20 独立行政法人国際交流基金編（2013）前掲書p.4

**A Study on Japanese Language Teaching for Chinese Students
studying in Japan
—Focusing on Reading Comprehension—**

Keiko OGIHARA ^{*1}, Sulian WU ^{*2}, Xiucheng SHA ^{*3}

^{*1}Course of Principal Human Sciences, Department of Human Development, Faculty of
Humanities, Kyushu Women's University

^{*2}Tianhua Institute of Shanghai Normal University

^{*3}Kyushu Kyoritsu University

No English abstract